

新しい考えをとり入れてくれるように、とお願いしました。今までのやり方と自分の考えた新しい教え方とどちらがうのか、どんなすぐれたところがあるのかなどを、実際に行ってみた結果を書き加えて、くわしく説明したのです。

しばらくしてどいた文部省からの返事は、今までの方法がよいというだけで、伊策の考えはとり入れてもらえませんでした。

伊策はその返事を読んで、手紙では自分の本当の考えは伝えられない、直接文部省に行つて説明すれば、わかつてもらえるかもしれない、と思うのでした。

新しい珠算を広めるには、学校の先生の片手間かたてまの仕事ではできない、と伊策は考えました。珠算の研究と、新しい珠算のために、自分のこれからの人生をかけてみよう、と、伊策は約三十年間の先生の生活を、きっぱりとやめることにしました。

伊策が初めて文部省にお願いに行つたのは、昭和二年（一九二七年）の四月